

ルサ相泊地区における植生の現状とエゾシカ密度調整のための植生モニタリング対象の検討

石川幸男（専修大北海道短大）、田崎冬樹、梅本和延、若原正博（北開水工コンサルタント）

1：目的

知床半島の羅臼側に位置するルサ・相泊地区の低標高部は、半島におけるエゾシカの一越冬地である。この地区は、知床世界自然遺産地域においてエゾシカの採食圧を軽減し、植生、生態系の回復を図るために実施されているエゾシカ密度調整事業の候補地として指定されており、知床岬地区での取り組みに続く事業の取り組みが検討されている。このため、密度調整の実施に際しては、その効果を検証、評価するために植生をモニタリングする必要がある。

この地区の植生の実態に関しては、環境省によって整備された 1/25000 植生図等があるものの、各群落の組成レベルの詳細に関しては資料がすくなかったことから群落組成調査を実施し、この地区に分布する群落タイプを明らかにした。また、この結果に基づいて、シカの密度調整の効果を評価するための植生の対象を検討した。

2：調査方法

2010 年 8 月 17 日から 19 日にかけて、相泊港からルサ川までの区間、標高約 300m 以下の地域を対象に植生調査を実施した。調査では森林とササ群落を含む草地において、優占種によって区分した群落ごとに複数の調査プロットを設置した。今回の調査では、今後の再現性を重視して円形のプロットを採用し、森林に設置されたプロットの場合は中心にプラスチック杭を埋めて GPS で位置情報を取得した。草地の場合には、海岸断崖などでは杭を設置できなかったことから、位置情報のみを取得した。プロットの大きさは植生高に合わせて、森林では 225 m²から 400 m²（方形区に換算して 1 辺 15m、および 20m に相当）またササ群落を含む草地では 4 m²から 25 m²（1 辺 2m から 5m 相当）とした。各プロットの各階層において、種ごとに優占度階級を判別した。

3：植生の現状

森林で 10 プロット、草地で 34 プロットを設定した。森林ではトドマツを主体とする針広混交林と、亜寒帯性落葉広葉樹であるダケカンバ林とが尾根から山腹斜面に広がり、これ以外の森林タイプとしては、ルサ川河畔にヤナギ類からなる林とミヤマハンノキ林が確認されたのみである。草地としては山腹にササ群落が広がり、このほかに湿性の草地が局所的に残存していた。過去の調査記録からは、海岸に接した急涯部分に海岸要素を含んだ草本群落が記載されていたものの、現状では道路改修と雪崩防止工事によって地形改変が著しく、これらの場所では吹きつけられた外来牧草が優占している地点が多く、さらにシカによる採食も各地で認められた。

4：シカ密度調整に向けたモニタリング対象

この地区の森林の主体をなす針広混交林とダケカンバ林では、ともに林床にはササ類が優占することが多かったものの、前者で針葉樹の優占性が高い場合にはササ類の優占度が低下し、各種草本が生育していたと考えられる。しかし、こうした場所では冬期のシカ糞が目立ち、すでに越冬するシカの採食によって林床の草本の多くが消失しているものと推察された。

草地としては、自然性の高い海岸植生はほとんど残存せず、山腹にササ群落が広がっているのみであった。海岸の道路に沿って分布する人工法面とそれに付随する草地ではイネ科草本が優占する地点が多く、これらの種は、知床岬でも観察されたように採食圧の低下に敏感に反応すると考えられることから、アクセスの良い道路沿いの法面を中心にモニタリングサイトを設定することによって、密度調整の効果が検証可能と期待できる。なお、尾根から山腹に分布する針葉樹が濃い混交林の林床においても回復が期待できるので、サイト設置を検討する価値がある。